

同人誌（2017年5月号）

風狂

風狂の会

詩

静物	長尾 雅樹
泣く女	なべくら ますみ
T へ	原 詩夏至
出口	北岡 善寿
列車の中で	金 得永
成熟を説く人へ	高村 昌憲
砂の暗号	出雲 筑三
万葉集	高 裕香

風狂ギャラリー

三浦逸雄の世界（十八）	三浦 逸雄
-------------	-------

エッセイ

壊れゆく理性	神宮 清志
--------	-------

翻訳

アラン『わが思索のあと』（三十四・最終章）	高村 昌憲 訳
-----------------------	---------

執筆者のプロフィール

読者からのコメント（2017年4月号）

枯れた^{ほおずき}酸漿の実や
魚の骨の構図を描いて
円柱型の花瓶から
配置されたフラスコやビーカー
科学の実験道具が姿勢を取る
フラスコの中の赤錆色の水や
ビーカーの中の枯れ酸漿の皮が映える

透視された豊饒の点景
枯れ枝の心象から
冬日の寒風を孕み
流芒する気流を構想して
白光する鏡台の中の蔓草の還流
凝視する物体の迫真性を
確かな輪郭で素描しながら
想像力の極限から空間を構築する
背景に塗り込められた鉄錆色の壁
枯れ草の印象を定着させて
枯淡の材質が充足の願望を測る

灰白色の布敷から
眩ゆく照り返された残光が飛散する
流線形を構成する配色の妙から
放射する素材の存在感を確かめて
沈黙の画布が語りかける叙景は
雑然とした単純素朴の映像を伝える

並べられた無用の長物の佇む姿から
発散する廃物の無惨な即物性を垣間見て
語るべきものがある。

美の極地は廢殘の劣悪の秩序にもあるかと
問うべきものがある。

眞実の感動は無造作の老殘の図にもあるかと
答えるものは一枚の彩色された画像のみか

駅コンコースのうす暗い一角
向き合って話し込む二人の女性
よく似た雰囲気の ちょっと見美人
仕事はC Aとか S Eとか今的な感じ
化粧は控えめ 背も高く格好良い

コインロッカーの扉に
体を支えるようにして立ち
何事かを訴える一人
今にもあふれ落ちそうな涙に
ハンカチを握りしめて

こらえ切れなくなったのか
女が声を放ち泣き出した
顔を隠そうともしないで
丁寧に塗り込んだ
目元の化粧が溶けだす

黒い涙を流し鼻水まで垂らして
顔をゆがめて泣く
ピカソの画
〃泣く女〃より
もっとひどい顔

怪訝そうな顔をして
振り向きながら通り過ぎる人もいるが
誰も声を掛けようとはしない
どうしましたか とか
気分が悪いですか と

隣で見守る女性にも
手の出しようがない様子
ただ黙って見つめるだけ

帰りを急ぐ人たち
一日の終わりを気にしながら
ひたすら前だけを見て行く
ひどい顔の女を置いて

Tよ

おまえが逝ってしまって

俺は

途方に暮れてしまって

深夜

一度寝たパソコンを起こして

こうして

一人で座っているわけだが

おとといなんだ

ほんのおとといなんだよ

俺が

おまえのお母さんと一緒に

みんなで

短歌の話などしながら

公民館の机を囲んだのは

「ねえ、今日は来ないの、Tは」

桜は

その町では

もう

すっかり

終わっていたんだが

Tよ

おまえが

仕事に悩んで

長く会社を休んでいたことは

俺も

みんなも

知ってはいたけど

それでも
暫く
飲んで喋ったら
おまえは
やっぱり
おまえだったし
俺は
いつでも
楽しかったんだよ
歌会后
おまえが
ふらりと現れて
居酒屋の
座敷の
空いてる座布団に
どしんと
腰を下ろし
俺の手渡した
書き込みだらけの
詠草プリントを
見ながら
時々
はっとするほど
鋭いコメントを
腹式呼吸で
突っ込んでくるのが

Tよ
安心しろ
おまえの遺歌集は
俺たちが
みんな
必ず出す

何と言っても
おまえは若くて
才能も
随分あったからな
もっとも
その自覚と責任が
どこまで
食い込んでいたかは
知らないけど

しかし
それでも
今
ぽつねんと
中空の
おまえに
俺は訊きたいんだ

Tよ
問題は
そういうことなのか？

それとも
全然
違うんじゃないのか？

あと何年か

いや あと何日か

指折り数えてみることもないから

永遠は永遠に無言である

などと分りもしないことを言って

澄ましていたくても

どうしても頭がそこへ行く

誰にだって暮しはある

蝦で鯛を釣ったり

酒や女に現をぬかしていようと

天から札ビラが降る夢を見ようと

日々の暮しは退っ引きならぬものに繋がる

追われ追われてやがて

無限の闇の入口に近づく

地獄に落ちるか

天国に昇るか

とってそんな場所が本当にあるのか

あるのかと言ってみても

在ることにはしておかないと

亡霊たちの納まりがつかない

白樺の森の間に
そっと音もなく近づいた
軽井沢の朝
目の前に見える雪原
トンネルを走る新幹線

白い肌を音もなくさらした
白樺の純白
白い頬だけ残した雪
ちらちらかすめる鶺鴒の巣が
恋しい 恋しい *

鼻がヒリヒリ 耳も遠く
山も野原も変わる
南へ東へとさまよえば
山と星の気が
雲のように下りてくる

ゆっくりと

※本作品の日本語への翻訳は金一男氏による。

(* 訳者注／韓国では雪原を歩くカササギの姿が冬によく見かけられ、とても趣がある。
ここでは、作者が軽井沢の冬の風物と韓国の冬の風物とをオーバーラップしている。)

感情の段階は三つあると言う
情動と情熱と情操に分かれる
最も高次の感情は情操と言う
人間だけが常に許されている

それは成熟した人間が理解する
洗練されて上品で穏やかなもの
それは芸術作品を創る心になる
美を感じて考えて行動するもの

子供は未だ情操を知らないから
子供と大人の美は同じではない
子供は大人に阿る様になるから
子供は成熟した精神を知らない

大人は成熟した儘子供に戻るな！
子供っぽく振る舞う必要はない
玩具が欲しくても買って貰うな！
地位も名誉も又稚拙に違いない

演説にも論争にも情操は無いのだ
充実した生命に大声は無用と言う
怒りにも恐怖にも思想は無いのだ
健全な精神には成熟が必要と言う

誰だね 機密レベル三を写したのは
砂場暗号は一分後に自動消去される仕組み
あと五秒という時に撮影されるとは

二日後に奥多摩からドーム百杯分を発射せよ
定番の杉花粉がいいだろう
そこまで察知したかは不明だが

我々は最強の人間を封じ込め支配する
そのために花粉弾が必要となる
彼らは愚直にマスクするに違いない

まだ作戦が露見した可能性は否定できない
今後は砂場からの緊急指令は
やんちゃ坊主以外にも気をつけねばなるまい

この他愛もない三次元暗号に眼をつけるとは
イソカニ族の子孫だとしたら天敵になる
奴の弱点は自分と違うと変人と思う癖がある

快晴の空に何故か雨乞い傘をもっているのが奴ら
そして我々の思考の混乱を加速するために
マラルメを唱え 海の膨張を待っているのだ

よろずの言葉

よろず人の思い

よろずの神に祈る

天皇 貴族 下級官人

防人 詠み人知らず

漢文学び うつろう時を悟る

大和の国の百済人

異国の地で文字を綴り

万年の祈りの中で 歌を詠む



三浦 逸雄 「午後の室」 15号（麻布 油彩）

人は理性をもっている。理性があるから、日常生活も破たんなく過ごせている。人間関係において、ある一定の関係が保ってゆけるのも理性があるからである。理性はある場合意外と簡単に壊れることがある。理性が壊れると、生活も人間関係も暴発してしまうことがある。暴発まで行かなくても、ひびが入ることになる。理性は脆いものである。ある日ある時些細なきっかけで理性が破壊されて悪魔に豹変する、これが人間という存在である。

人は欲望を抱えて生きている。出世欲、自己顕示欲、支配欲といったものから、お金に対する慾、性に対する慾、といった根源的な欲望がある。さらにはもっとどす黒い欲望もあるだろう。そうした欲望が理性を破壊する力になる。また極めて自然な感情の一つである嫉妬心、これも理性破壊の大きな力になる。憎しみも、恨みも同じである。こうした力を内に蔵しつつ生きているのが人間という存在である。これらの力を野放しにしたら、すべてが崩れてしまうことを知っているから、理性で抑えている。しかしその理性がある日ある時いきなり破壊されることが起る。

今年（2017年）3月24日登校途中の小学生女児が行方不明になり、数日後に無慚な他殺体で発見された。被害者の9歳の女児はレエ・ティ・ニャット・リンさんというベトナム国籍の誰にも好かれる可愛い少女だった。容疑者として逮捕されたのは、その小学校の保護者会会長の渋谷恭正（46歳）である。この事件は大きな話題となり連日テレビその他で報道された。教育評論家をはじめ、多くの有識者やらタレントやらのパネラーがあれこれ論評した。

「強い怒りを感じず。保護者会の会長がこんなことをするなんて」

「なぜこんなことが責任ある子供を守る立場の者に出来るのか」

「今後こんなことが二度と起こらないようにしなければならない」

こうしたコメントはいつも繰り返されてきたものだ。決まり文句の羅列である。もっと突っ込んだ意見があってもよさそうなものを、と思う。

犯人として逮捕された渋谷容疑者は、日ごろ温和であり、優しいひとだったという近所の人の証言が出ると、パネラーから「二重人格」という言葉が出た。この言葉もあまりに紋切型で、少しピントがはずれていやしいかと思った。さらには容疑者の日常のこと、身辺のことがかなり興味本位に報道されて、異常な人物というイメージがしだいに膨れ上がってゆく。

しかし彼はその辺に居る普通の人なのだと思う。多くの人が優しい人だったというのなら優しい人に違いないと思う。そして温和な人なのだと思う。普段優しく温和な人も、不機嫌になることもあるし、怒りを露わにすることだってあるだろう。そして今回のように暴発してしまうことにもなるのだ。それが人間というものなのだと思う。

われわれだって理性が壊れることがある。静かに振り返ってみれば思いあたることが誰にだっ

である。わたしは理性が破壊されて周辺に迷惑を及ぼしたことは無数にあった。それが彼のように重罪に結びつかなかっただけだ。それにしても渋谷容疑者の場合どうしてあんな重大な罪を犯すような形で、理性が破壊されて悪魔に豹変してしまったのか。このことについて彼を取り巻く日常生活から少し考えてみたい。

不動産賃貸業という職業、簡単に言えば親の遺産のマンションのオーナーとして生計を立てていた。このように部屋代で生計を立てるのは、老後のためにアパートを建てるというのが多くのパターンであろう。マンションとなればより高額の収入になるはずだ。物価にスライドする収入源を親からもらったのだ。羨ましいご身分というほかない。

普通ならお勤めとかに行って、苦しい仕事に明け暮れなければならない。そうなるとう偉くなることも至難だが、墮落することも難しい。墮落したくとも押し上げられてしまって墮落させてくれない。偉くもならなければ墮落もしないという宙ぶらりんの状態にいるのが一般サラリーマンである。しかしマンションのオーナーなら自由な時間があり余るほどにある。人の指図は一切ない。ということは勤め人のように宙ぶらりんでいることがかえって難しく、ともすれば墮落するようなことになりやすい。

時間に縛られない生活、何でもできる生活、これは本人が豊かな内面をもっていれば、それを活かすために充実した生活を築いて行ける。けれど特殊な個性をもたない普通人ではそうもいかない。とかく虚無感漂う時間の中に身を置くことになりがちである。そして倦怠と怠惰に支配される。そして「こころ」も「暮らし」も墮ちてゆく。

このように時間がたっぷりあって暮らしに困らない場合、何かに打ち込めればよいだろう。スポーツ、芸事、モノ作り、その他もろもろ。それも趣味とかではなく本格派を目指すべきだ。何でもいいから奥の深い、一生かけてやりがいのあることに打ち込みたい。その結果人類のために大きな貢献をすることもあり得る。そんな例はいろいろとある。芸術家はだいたい貧乏と決まっているが、そうでもない場合もある。銀行家の倅だったセザンヌは、人にダメ画家といわれようと、自分の信ずる絵画を描き続けることが出来た。画壇から全く相手にされず、院展の入選など思いも寄らず、ただのびのびと描き続けることが出来たのである。その結果があの後期印象派という画期的な芸術を打ち立てることになった。暮らしに困らなかったという環境がもたらした結果であって、そんな例は意外と少なくない。

そうした方向をもちえなかったけれど、男も中年に差し掛かってくると、このままでは終わりがたくないと思うようになる。男たるもの何か地位、肩書が欲しい。マンションのオーナーといっても、少し昔風のいい方をすれば「おおやさん」ではないか。おおやさんではいかにも世間体が悪いと思ったのだろうか。そこで保護者会会長という肩書をもった。自ら立候補してなったという。保護者の中から役員を選び、会長を選ぶというのはなかなか難しい。成り手が居ないからだ。ところが立候補してくれたのなら喜んで皆でお願いする。彼はほかにも団体の役員に就いていた。

こうしてある地位に就いたものの、成ってみると案外苦しいものだ。駅前のパチンコ屋へ行く

のも世間の目をはばかりになる。居酒屋でオダを上げるのも気が引ける。まして風俗店に行ったり、ヌード劇場に入ったりは出来なくなった。いわば自縄自縛に陥ることになっていった。

こうなると欲求不満は溜まるいっぽうになり、出来ないとなると、ますます膨れ上がってしまう。いわゆる「ガス抜き」が出来ない。欲望というある種の巨大なエネルギーが溜まって押し上げてくるのをどうしようもなくなる。その上自由の時間がありすぎるという「怖さ」と「危うさ」。さらには漂う「虚無感」...こうした日常生活の中で、彼の理性がある日ある時突如として破壊され、悪魔へと豹変してしまったのだ。

以上のようにこの事件を理性の破壊という観点からあれこれ考えてきたが、ここにまったく別の見方があることを知ることが出来た。ある人の主張によると、この容疑者はもともと良心や罪の意識をもたないパーソナリティーの持ち主で、最初から邪悪な目的遂行のために保護者会会長という役職に就いたと推測するという。同じ目的をもって小学校教員になる人も居る。教員による「ロリコン犯罪」「小児姦犯罪」が後を絶たないのは、これを目的に職業を選択しても犯罪歴でもない限り、そのことを他人には見破ることが不可能ということがある。教員免許がなければ保護者会会長にでもなってチャンスを窺うということもあり得る。この事件は理性が壊れたが故の犯行と違い、この容疑者はもともと良心とか罪悪感をもち合わせていない人間、すなわち「サイコパス」の典型ではないか。本人は犯行の露見を悔いることはあっても殺人行為を悔いる気持ちはないだろうと推察する。

この衝撃的な主張の根幹をなすのは「サイコパス」という心理学上の概念であろう。中野信子著『サイコパス』はいまやベストセラーだそうで、この言葉と概念はかなり多数の人々に知られているものと思われる。このテーマでの本は多数出ているし研究書・専門書も入手できる。それらを読んで考察してみる必要性は大いに感ずるので、今後の課題ということにしておきたい。少しばかり瞥見することしか出来ないけれど、そのうえでの印象的感想をもつにとどめる。

サイコパスとは日本では「反社会性パーソナリティー障害」と名称され、病気ではないからほとんどの人々が通常の社会生活を営んでいる。しかも意外と多く存在するというから、われわれの周辺にも居ると思われる。その具体的パーソナリティーについて述べられているのを見てゆくと、次のような諸点が指摘されている。「想像力が異常に旺盛で、空想を現実より優先する」「自己中心の空想に陶酔して、他人の批判を許さない」「自尊心が過大で自己中心的」「表面上は魅力的で口達者」「自信満々でよく自慢話をする」「ずる賢くて人を操ろうとする」「刺激を求める」「他者に冷淡」「自己の過ちを認めない」「性関係に奔放」「恐怖や不安、緊張を感じにくく、大舞台でも堂々として見える」「多くの人がやらないことを平然と行うため、挑戦的で勇気があるように見える」等々。こうした各項を見ていると、周辺にそうした人物を思い浮かべたくなるし、実際に存在することに気付かされる。すべて当てはまらなくとも、いくつかに当てはまる存在はどこにでも居る。ばかりではない、自分自身にも思い当たるところがある。ということは、こんな傾向はかなり多数の人にあるのだろうと考えられる。

一つの犯罪からいろいろ思考していると、人間という存在がいかに多様性があり、多面的で、謎に満ちているかを痛感せざるを得ない。既成の言葉、既成の概念で決めつけることがいかに愚かしいことかと思う。人は不完全な存在であり、資質的に問題を抱えている者も多い。脆くも崩れ去る危険をもった理性に、かろうじて日常が支えられている。かくて重大犯罪が一触即発で起こる危険がいつも身近にある。その状態が身邊に充ち満ちている。（完）

宗教

最早、順序を見出すしかありませんでした。そして年齢が私に課したのは、子供の宗教の様なものである〈物語〉から始めることでした。しかし〈物語〉に大変自然な、神人同形説であるが故に不都合が無くもなかったのは、人間の形をしている場合でも崇拜されるのは何時も動物である田園の宗教において少しも確かなものがなかったことです。何故でしょうか。農民や家畜飼育者の全ての思考を占めているのは、多産性であるからです。しかしながら伝統の力によってここで、より一層確かになる祖先崇拜をそこに入れる必要があります。というのも幾つもの原因がそっくり隠されていて、長い期間の修行時代においては年長者が最も良く知っているからです。しかし他方では、ヘーゲルが指摘した様に、都会の正義に釣り合わない家族的宗教は四季の暴力や愛の残忍さという性質を持つ様になるに違いありません。そこから家庭の悲劇や容赦のない復讐が生まれます。ここには魔法使いや神託が支配しています。ヘーゲルは最も古い神々を、まさに泥と血の神々と命名しました。もしも戦争と征服の秩序を田園の野蛮と比較するなら、都会に固有のそれらは正義を表しているのです。但し、私はヘーゲルを読んで理解して行ったのに応じて今は豊かであり、重大な間違いもありません。そして明白な真実において、文明の歴史は神話的那のものであるということです。何故なら農民の暴力は何時も同じでしたし、今でも同じであるからです。平原の中央には常に一つの町があり、境界線を立てるために測量師と判事がいましたが、法律と測量を軽蔑する代わりに聖人がおりました。バビロンの地には略奪する羊飼いたちしかおられませんし、カルタゴの地も同じ様なものである如く、私の眼から見ると進歩とは、どちらかと言えば次々に反復する動揺の繰り返しの様に見えます。それでも、これらの略奪者の家では、ホメロスに見る様に未知の人を歓待する決まりが、怒りよりも上位にあります。そして最も重要なことは、都市によって定められる文明が田園の情熱を多く弱めることはなく、あらゆる段階の全ての錯乱における愛の陶醉は最も注目すべきものであり、今なお罪の源泉になっています。従って二千年か三千年に限定して進歩の曲線を描くなら、既に人間性を裏切っているので、革命における過度の残虐さも恐ろしくて残酷な夢想の様に見えます。ですから歴史哲学は、私の好みに合う程十分に生理学的ではありません。しかもその主題が何度も叩かれて、屢々私たちの努力も先に延ばすことで終わるのは、人類の平和が恐らく千年かそれ以上の忍耐が求められていることを何度も理解させられているからであると私は判断しています。それ故に、既に一度言ったことを再度言うのですが、私は様々な宗教を人間の進歩の段階ではなくて、人間という地層の一時期として考察することを選択したのです。そして歴史が議論して敷衍されることはなく、反対に私は簡潔になって人の心を打って欲しいと思いました。何故なら私が創りたかったのは人の肖像だったからです。例えば戦争は、人の品性の進歩で終わるというのでなく、反対に戦争は現在も過去もそうである様に、将来も常に脅威を感じさせるものであるということです。如何な

る道徳も正義もその時その時は同じなのですが、そうでないと人は嘲笑します。恐らく私は、読者がその存在の全てを支えている一瞬を忘れることが可能にならないと、様々な層の人々に感動し心を打つための意図を十分に説明しなかったことになります。

しかし私は、もう一つ別の目的に狙いを定めました。何故なら知識への全ての道は、最高の知識でさえも私たちの先人たちは直近の先人も例外なく、私たちよりも愚かであったという観念に占められていると私は理解したからです。真実のためには新しい観念しか受け入れないこと、そして古いものに間違いを見付けることに優れた人々は、先ず夢中になりました。自らその様に信じる故に、本来の近代になるというその精神は全てが、人間的精神への一種の礼拝である文化には深く対立する内容のものなのです。そしてこの狂った歴史の迷信は、軽蔑するためにしか書かれず、取分け宗教の同じ歴史において示されています。そして何時も古代の信仰には先入観を持っていて、何時も人間の代わりに野生的で素朴な動物を見出そうと焦っていました。それは、虐殺や火刑や宗教戦争の全ての恐怖を、十字架に架けられた人々への崇拜や聖母マリアや直進する聖人たちによって説明したいのです。それは極めて明白に、力による錯乱に反対することです。そして私たちの周りや極めて近くにも同じ激昂や責苦がある如く、私たちの周りにも同じ信仰が同じ形でありますし、こう言って良ければ同じ祈りがあります。ところが理性を持った友人たちは、全く純粋な信仰や火刑に対して同じ激昂から苛立ちながら、私には終わりの見えない根拠のない弁証法を余儀なくします。そして彼らは自分自身で、イエスは最後の審判に臨んで、その年には魂の平等を教えませんでしたし、その時の思想はイエス独自の政治と同じ魂であることを証明しようとするまでは盲目になっています。この思想が空想的で、もっとはっきりとそしてもっと良き正義を齎す以上に慎重に言うなら、利己主義によるものであると主張したいなら、まだ幸いなことです。その時は私が思考と感情の矛盾を感じながら（恐らく、私自身の裡も同じです）、それは動じない反抗を表していて、私たちがそこから出発することはありません。安らぎを求めて教会へ行くあらゆる善良な女性たちに、そしてもっと正確に言うなら私たちが終わりにしたい、まさにその不正を自ら告白するあらゆる善良な女性たちに私たちはどれ程の同盟者を失っていることでしょうか。政治家たちもこの混乱を演じるべきではありません。私たちに反対して演じているのは私たちであり、私たち自身です。

それでは私は、この善良な女性たちに従うこと、ロザリオの祈りを言うこと、ミサとかその種のものを言って貰うことを勧めるのでしょうか。決してそうではありません。私は何時もそれに抵抗しましたし、内部的にも如何なる疑いもありません。何故ならまさしく私は、この教義の真実と儀式の真実さえも見えていたからです。人々が弱さからにしろ感情からにしろ、どちらかと言えば明らかに不当ですが私たちに固有の英知への不信からにしろ、それを信用するにしろ、私たちの壊れやすい文明が、少なくとも宗教の真実がそれを信じる人々には見えさえすれば、私に何か恐れるものがあるだろうとは思えません。何故なら、天国や地獄や魂の救済を文字通りに信じることは、それが不条理で人間の及ばない処のものであるとしても、宗教は自由であると判断することだけは危険であるからです。というのも、そこでは全てが奇跡で全く理解出来ず、全て

を剥ぎ取られた聖人たちの陶醉と、剥ぎ取りに行く政治家の陶醉との区別は最早無いからです。更に、他の陶醉に関しても同じです。汚れた愛に基づく商人の寛容も同じです。狂信を認識しなかった者は、兄弟の中で最も高邁な人々も認識しないし理解もしないと私は言います。そして以上は、教義の歴史や記録への批評によって神秘を反論することは非常に間違った努力であると私には思える理由なのです。実際にスコラ哲学に反対するスコラ哲学も、常にスコラ哲学なのです。イエスがそう命じたからと言って私たちが兄弟であることを望む者も、イエスが存在したことを証明もしなかった故に私たちが兄弟であるのは本当ではないと証明する者以上に盲目ではないと私には思えます。この激論は終わりにしなければなりません。恐らく、饒舌を提供する豊かな道によるしか続かないでしょう。私としてはユゴアの驢馬の様に、何千冊もの本は時間と努力を無駄にしていると考えます。確かにユゴアには、全てのものをすっかり和解させる巨大な努力は正しいのです。もしもそれが自然やリズムや行進、あるいは舞踊や歌への陶醉によって恐らく齎されただけであっても、詩人であるユゴアは親密な汎神論によって神々との結合を修復するでしょう。それは欲望を神格化することであり、全てに口づけすることです。でも、散文はユゴアにおいてももっと一層慎重です。

私が何処へ行くかは明らかです。しかし、その実行は容易ではありませんでした。表面上の尤もらしい考察には耳を塞いで聞こえない振りをしなければなりませんでした。私が述べた計画に従って、組合員教師の雑誌に宗教哲学を毎日規則正しく書き始めました。彼らは大変な疑念の中でこれらの頁を読んだのであろうと私は推測しますが、それは少しも読んでいないことなのです。それに私は、殆ど無いことですが教育学のことも書きました。しかしそれは、私には凡そ狂っている様にしか見えない所謂近代的な教育学とは一致しないものです。何故私は、子供が先ず最も堅苦しい詩で少しも子供らしくないものを暗誦して欲しいのか、そして何故私は、精神の品位を落とすだけの娯楽的な学問よりもこの礼儀正しくて気品の高い朗読者の方を上位に評価するのか、私の本を注意して読んだ人々なら良く理解することと思います。でも、それは何でしょうか。私の最も大切な友人たちにお世辞を言っているのでしょうか。いいえ、そうではありません。私は只、彼らと一緒にいるだけです。少なくとも彼らはそのことを良く知っています。

その当時（一九三〇年頃）、女子校のセヴィニエ校での講義が一般にも公開される様になりました。私はもう一度〈神々〉の大問題を、ぎっしりと詰まった真剣で忠実な聴講者の前で組み立て様と試みましたが、聴講者の中から多少の例外は除きました。何故なら流行を追う人も混じっていたからです。必然的にこの種の教育は終わりが見えていますし、それに大した成果もあり得ません。それで自由な時間を前にして直ぐに私は、最長でも毎朝二時間、人々が眼にしている『神々』を書き上げました。どんなに人々が明瞭に理解するのが難解であっても、私は何一つ変えたくありません。というのも私の目的は、沢山の教義に一つの教義をつけ加えることではなかったからです。反対に全ての教義と対抗させて、私の縁取りを切り立たせることにあったからです。その時には、私はもう一冊の本も許して貰えるでしょうが、この本はここで終わることにします。そしてこの本を、慎重さと友情で溢れた『神々』の長い序文と受け取って戴くだけで

十分です。

一九三五年七月～九月 ル・プルデュにて
(了)

執筆者のプロフィール（五十音順）

出雲 筑三（いずも つくぞう）

一九四四年六月、東京都世田谷区下北沢生まれ。千葉工業大学工業化学科卒。混迷と淘汰のたえない電子部品の金めつき加工を手掛けた四十五年を無遅刻無欠勤で通過した。芝中時代は実用自転車1000mタイムトライアルで東京都中学新記録で優勝、インターハイでは自転車ロードレースでチーム準優勝、立川競輪場での個人2000m速度競争において総理大臣杯で三位となった。趣味として歴史と城物語をこよなく信奉し、日本百名城に挑戦中である。仕事面では日本で最初の水質第一種公害防止管理者免許を取得、そのご東京都一級公害防止管理者、職業訓練指導員免許など金属表面処理技術者として現役で勤務している。三行詩集『走れ満月』（二〇一一年三月）・『波濤を越えて』（二〇一二年九月）を出版。埼玉県所沢市在住四〇年になる。日本詩人クラブ会員。時調の会・世界詩人会議会員。

北岡 善寿（きたおか ぜんじゅ）

一九二六年三月十日生まれ、鳥取県出身。文化果つる所と言われたばかりか、県下の馬鹿の三大産地の一つという評判のあった農村に生まれ育ち、一九四三年に出来の悪い生徒が集まる地元の中学を出て上京したが、一九四五年三月現役兵として鳥取連隊に入隊。半年後敗戦で復員し再上京。酒ばかり飲んでいる無能なジレットタントにすぎなかった。大学のころは今は故人の北一平や東大生の本郷喬らと同人誌「彷徨」で一緒。一九七四年文芸同人誌「時間と空間」創立同人。二五号から六四号（終刊）まで編集担当。一九九四年「風狂の会」会員となり現在に至る。詩集『土俗詩集』（一九七八年）、『高麗』（一九八六年）、『樞』（一九九一年）、『痴人の寓話』（一九九四年）を出し、詩集以外のものとして随筆集『つれづれの記』（二〇〇三年）、『続・つれづれの記』（二〇〇九年）、『一読者の戯言』（二〇一四年）を出版。日本詩人クラブ永年会員。日本ペンクラブ会員。風狂の会主宰者。

金 得永（きむ どうくよん）

一九五六年大韓民国全羅南道新安郡生まれ。木浦、光州、ソウルで海を故郷に宗教に傾倒しながら育つ。一九七九年、光州教育大学を卒業。一九九一年、日本奈良教育大学大学院修了。一九九五年檀国大学校教育学博士号（日本研究）を取得。二〇〇一～二〇〇四年、日本の岐阜韓国教育院長に派遣勤務し、『古代からの韓日交流の歴史』出版。その後、『日本生涯学習都市フロンティア』、『日本の生涯学習まちづくり論』、『人性千字』、『教師のためのソ-シャルスキル』、『生涯学習まちづくり論』などを韓国で出版。二〇一五年から日本東京韓国学校の校長として赴任。子供たちが幸せな世の中、教室の中の幸福条件を整備中。目に見えない教育にも力を尽くしている。休日は、日韓古代史を中心とした神社や寺院を巡礼。古代人と、自然との対話を試みている。

高 裕香（こう ゆうか）

一九五八年二月二日生まれ、大阪市出身。幼い頃から、日曜日になると父親に大阪城公園に連れていってもらい公園中を駆けめぐる。菜の花畑やレンゲ畑で ちょうちょうやトンボを追いかけてたり、おたまじゃくし、ザリガニを取って遊んでいた自然児。なんとなく父からルソー教育を受けていた。五歳からピアノを習う。大阪基督教学院の児童教育学科を卒業後小学校教員になる。現在、東京韓国学校で日本語の講師を務めている。日本語教育学会会員。ヤマハピアノPSTA指導者。「心のアルバム」・「虹の架け橋」・「赤い月」・「日韓文化交流合同詩集」などのアンソロジー詩集に参加。二〇〇七年

度「民団文化賞」優秀賞受賞。二〇〇九年、二〇一一年度「民団文化賞」佳作賞受賞。日本詩人クラブ会友、時調の会・世界詩人会議会員。

神宮 清志（じんぐう きよし）

一九三七年一月九日、盧溝橋事件のあった年、徳富蘆花の住処の近く（東京府千歳村）で生まれ、幼年時代をそこで過ごした。二歳で父に死に別れ、敗戦前後の混乱の中、引っ越すこと十回あまり、小学校時代から働き、冬でも素足で過ごすという貧困の中で育った。大学卒業後サラリーマンとなって暮らしは安定し、三十歳代半ばに能面師に弟子入り、以後三人の師匠についた。個展四回、団体展出品多数、最近では創作面も作り、イエス、ジャンヌ・ダルク等も作成した。能面制作はほぼ毎日ながら、最近は視力・体力の衰えもあり午前中のみ、午後は筋肉トレーニングとボールルームダンスに打ち込んでいる。いっぽう随筆同人誌「落」に四十年ほど在籍して、二百二十編の随筆を発表してきた。手作業をしていると、思いと考えが限りなく浮かんできて、書かずにいられない。いわば物狂おしいため息のようなものか。

高村 昌憲（たかむら まさのり）

一九五〇年三月、静岡県浜松市生まれ。明治大学文学部（仏文専攻）卒業。詩集は『螺旋』（一九七七年）、『六つの文字』（二〇〇四年）、『七〇年代の雨』（二〇一〇年）。評論集『現代詩再考』（A&E・二〇〇四年）。翻訳は『アランの「エチュード」』（創新社・一九八四年）、アラン『初期プロポ集』（土曜美術社出版販売・二〇〇五年）、ジャン・ヴィアル『教育の歴史』（文庫クセジュ971・白水社・二〇〇七年）。共同編纂『齋藤忠詩全集』（土曜美術社出版販売・二〇〇七年）。個人誌「パープル」（一九九六年～二〇一七年）、一九九八年に「現代詩と社会性—アラン再考—」が詩人会議新人賞（評論部門）。二〇一二年から電子書籍（ブクログのpapier）に、随想集『アランと共に』及びアラン作品の翻訳『一ノルマンディー人のプロポ』『文明国の戦争で真の原因になるもの』『神々』『神話序説』『家族感情』『わが思索のあと』『思想と年齢』『人間さまざま』『心の冒険』などを登録中。日本詩人クラブ会員。

長尾 雅樹（ながお まさき）

一九四五年生まれ 岩手県出身

詩と思想研究会所属

既刊詩集

『悲傷』『山河慟哭』『長尾雅之詩集』

なべくら ますみ

一九三九年 東京世田谷生 日本大学文理学部国文学科卒業

日本現代詩人会 日本詩人クラブ 時調の会 各会員

櫛自由詩の会同人

詩集『同じ空』『城の川』『色分け』『人よ 人』『川沿いの道』『なべくらますみ詩集』『大きなつぐら』

エッセー集『コリア スケッチラリー』（共著）

訳詩集『花たちは星を仰ぎながら生きる』（韓国・呉世榮）他

原 詩夏至（はらしげし）

詩人・歌人・俳人・小説家。一九六四年生まれ。東京都中野区在住。著書に詩集『波平』『現代の風刺
二五人詩集』（共著）、句集『マルガリータ』『火の蛇』（第十回日本詩歌句随筆評論大賞俳句部門努
力賞）、歌集『レトロポリス』（第十回日本詩歌句随筆評論大賞短歌部門大賞）等。現在短編小説集『
永遠の、地上の（仮題）』刊行準備中。典型的な「ウルトラマン世代」の「怪獣少年」で、齡知命に達
した今もなお、心のどこかがその永遠の「神話」の森を彷徨い続けている。十代後半から二十代前半に
かけてカルト的な宗教活動に没頭。その後フロイト、ユング、ラカン等の精神分析家の著作に傾倒し、
一時は専門の心理臨床家を志したこともある。好きな書き手はJ.G.バラード、M.ピーク、尾崎翠、埴谷雄
高等。絵画ならダリ、デルヴォー、バーン＝ジョーンズ、音楽ならドヴェツシー、ラヴェル、セロニ
アス・モンク等に魅かれる。日本詩人クラブ、日本短歌協会会員。

三浦 逸雄（みうら かつお）

一九四五年四月二日 札幌郡琴似町で生まれる。

一九六七年上京し 高円寺フォルム美術研究所、新宿美術研究所に通う。

一九七〇年スペインに渡り、マドリードの美術サークルCircro de bellas artesで人体デッサンをかさねる。
帰国前の一年は、ベラスケス、グレコ、ゴヤ、ムリーリョを見るために、プラド美術館へ足繁く通う。

一九八三年に帰国。

一九七五年以降、現代画廊（東京・銀座）、東邦画廊（東京・京橋）他で作品を発表する。

（以上）

読者からのコメント（2017年4月号）

アラン『わが思索のあと』（三十三） 物語：詩は真実に近い。現実にもっと近い人間や世界の歌と知りました。人間は人間にとって大きな障害物で、人間のことは上手く始末がつけられない。戦争を見れば分かります。神学全体が真実味を持って存在していると思います。神々は愛せられ、恐れられると言いますが、どうして宗教間での戦争が絶えないのでしょうか。

ダンスつれづれ噺：ダンスに限らず、初級者と上級者の違いはあるように思いました。健康で、生きる喜びを見つけ活動できるのは何より幸せなことと思います。

三浦逸雄の世界（十七）：蜜柑がきぼうのように見えました。

光の春：この明るい春の光の中で、老人が何か呟いている。敗戦から立ち上がり今を築いてきた老人。それにしても、この社会家族に、生きていくときにしか言えない思いをぶつぶつ呟くのは本音のように思えます。せめて「あないとし」と言われるようにと反省しました。

入学式：おじいちゃんが買ってくれたランドセルを背負って、学校の門をくぐる男の子。人生の一番うれしい時ではないでしょうか。喜びに満ち溢れています。

月とギターと：緩やかにギターが流れている。月が笑っている。ギターが奏でられても眠っていても、月は静かに聞いている・・・メルヘンですね。

宇都宮城：城の歴史は移り変わるけれど、霊峰は遥かに変わらないで聳えているのだと思いました。

バスツアー：ツアーの様子がよく分かりました。残念ながら、自然現象に左右され期待外れの観光になることもあるんですね。

食卓：疑問が、最終連で納得しました。

（以上）

同人誌 風狂 (ふうきょう)

第34号 (2017年5月登録)

<http://p.booklog.jp/book/114803>

編集：風狂の会 (担当：高村 昌憲)

編集担当者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masanorit/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/114803>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト